

7か月間生存した。

#### 16. 原発性及び転移性肺腫瘍(腺癌)に対するR-CAMF療法の検討

名古屋保健衛生大学内科

内藤龍雄, 石川平八, 加古恵子  
堀口高彦, 釈迦戸晃, 浅井清和  
高橋美奈子, 谷 源一  
上平知子, 榑原博樹, 末次 勸  
梅田博道

同 放射線科

佐々木文雄, 古賀佑彦

手術不能の原発性及び転移性肺腫瘍(腺癌)症例10名を対象として, 放射線療法, 化学療法の併用療法を行った。その内容は, 化学療法の治療効果増強の目的で, 100R×2回の放射線照射を行い, その後, 多種抗癌剤(CPM, ADM, MTX, FT207)投与し, 2週連続, 2週休薬という方式で行った。

今回我々は, このR-CAMF療法(特に腺癌症例を対象)の治療効果につき検討したので報告する。

#### 17. 肺小細胞癌に対する集学的治療

愛知県がんセンター病院

第2内科

西村 穰

浦田淳夫, 坂 英雄, 太田和雄

小細胞癌の内科的治療の指針は, Moのうちに治療を開始しCRを目標とするにあると思う。当院における成績をふり返ると, CRを得る率が高くなると共に遠隔成績も向上している。又長期生存者はすべてMoでCRを得ている。最近では放射線小量併用M-ETVFC療法のあと照射野をしばって4,000radsの照射を行い, このあとCOAM療法を行った症例ではCR100%, 2年生存率41%を得た。しばらくこの方法を行っていきたい。

#### 18. 喀痰及び気管支擦過細胞診

#### による肺癌の診断

藤枝市立志太総合病院外科

甲田安二郎, 錦野光浩

同 内科 中沢浩二, 茂木安平

同 臨床検査科

栗田雅史, 市沢末広

浜松医科大学病理 森田豊彦

浜松医療センター外科

武藤良弘

細胞診が癌の診断に系統的に実施されるようになった昭和50年以降の肺癌症例において我が病院の診断率を調査し, 更に切除例において病巣の状態や予後との関係を検討した。その結果我々の行なっている末梢病巣擦過細胞の成績は切除例では疑陽性を含めても66%と低く, technicの改善が必要とわかった。又切除例の検討で, 喀痰細胞診陽性例では術後再発が多く, 反対に長期生存例では陰性例が多かった。非切除例では細胞診陰性例は極めて少なかった。更に細胞診で癌と診断された非癌切除例を提示した。

#### 19. 婦人科医により発見された occult lung cancerの1例

愛知県がんセンター第2外科

陶山元一, 唐沢和夫, 国島和夫

高木 巖, 矢吹 賢, 加藤芳司

石川靖二

同 臨床検査部 佐藤秩子

59才, 男, 本年1月咳嗽のため禁煙。(BI 760)。以後咳嗽は治る。同時期に健康診断を受け, 胸部X線写真は異常を認めなかった。その後知人の婦人科医により喀痰細胞診を受けたところ陽性のため当院を紹介された。気管支鏡検査で右中間気管支幹を中心として多数の隆起を認め, 生検にて扁平上皮癌の診断を得た。右肺全摘出術施行し, 切除標本にて表層拡大型肺門部早期肺癌と診断された1例を経験し

たので, 考察を加え報告した。

#### 20. 左肺 Superior sulcus tumor に拡大手術を施工し, 術後イリジウム192による内照射を併用した肺癌の1例

愛知県がんセンター病院

第2外科

高木 巖

唐沢和夫, 国島和夫, 陶山元一

矢吹 賢, 加藤芳司, 石川靖二

52才, 男性。左第1肋骨のosteolytic change を認めた superior sulcus tumor の患者。鎖骨下動脈造影で狭窄所見が認められた。56年8月19日, 左前胸壁より第1肋間で開胸し, 左肺上葉部分切除, 鎖骨第1肋骨, 鎖骨下動脈合併切除を施行し, 上腕神経叢への残存癌巣付近に after-loading用チューブ6本を留置した。術後イリジウム192による内照射, およびLineacによる外照射を併用, 術後3ヵ月後の現在自覚症状消失し, 他覚症状も認めない。

#### 印象記

例年と同じく胸部疾患学会東海地方会および日本結核病学会東海地方会の関連2学会と合同で開催され, 20の肺腫瘍に対する演題が講演され, 臨床面および病理, 疫学の面から活発な討論ののち盛況裡におえることができた。最後に2学会と合同で東京医科大学外科の早田義博教授を招請し「肺癌とレーザー光線」の講演を拝聴し締めくくった。

一般演題では臨床疫学面からみた喫煙と肺癌との関連演題のほか, 診断ではCTやその他の non invasive な検査と病理所見との対比が検討された。

病理では稀な症例の報告があり, ホルモン産生肺癌の報告で